

石川県内の白木地挽物容器について

川畑 誠（公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター）

1 はじめに

古代北陸地方の挽物容器研究は、四柳嘉章氏の古代～近世の漆器製作技法に関する一連の研究〔四柳 1991・92〕を大きな契機とする。氏は、古代の上質な漆下地漆器に加えて、11世紀に簡素な渋下地漆器が出現、北陸・関東以北の地域で安価に量産できる渋下地漆器が急速に普及することを明らかにした。この成果に触発され、1990年代に古代から中世への食器転換に関して、北陸古代土器研究会、北陸中世土器研究会がそれぞれ視点を変えながら活発にアプローチを進めている。また、全国規模では、第39回埋蔵文化財研究集会「古代の木製食器」〔1996〕、国立歴史民俗博物館の中世食文化に関する共同研究〔国歴博 1997〕等が到達点の一つといえよう。近年では、全国の出土木製品の集成・データベース化〔山田他 2012〕や、能登の古代挽物容器の樹種、木取り等に関する研究〔久田 2019〕が注目すべき成果を得ている。

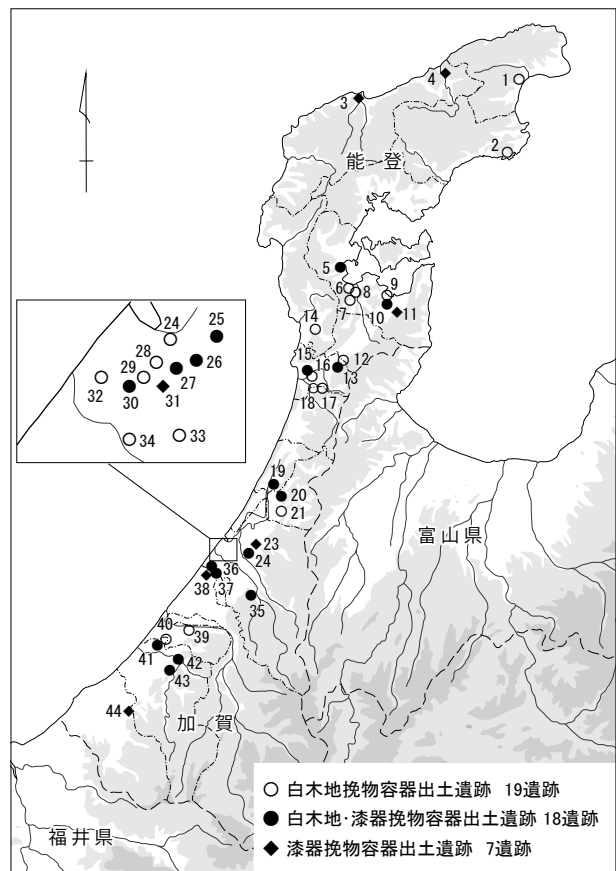
以下では、これら先学の諸成果に立脚して、石川県内の白木地挽物容器の概要を報告する。

2 出土状況

出土遺跡 県内の8～11世紀代の白木地挽物容器（荒型含む）出土遺跡は37遺跡で、内訳は白木地のみ出土遺跡が19遺跡、白木地・漆器出土遺跡が18遺跡と、同程度を数える（第1図・第1表）。分布状況は、第1図のとおり大規模開発が進む金沢臨海部が目立つものの、現時点で顕著な地域的偏在性を見いだせない。

遺跡の性格別では、一定レベル以上と評される遺跡または工房に類する遺跡が大部分を占める。おおまかに分類すれば、国衙関連遺跡（No. 11 小池川原地区遺跡）、加賀郡の港湾関連遺跡（No. 24～33 金沢臨海部）、公的要素をもつ遺跡（No. 13 四柳白山下遺跡、No. 20 加茂遺跡、No. 40 高堂遺跡等）、荘園関連遺跡（No. 36 中屋サワ遺跡～38 横江庄遺跡、No. 39 徳久・荒屋遺跡）、社寺関連遺跡（No. 19 指江B遺跡、No. 35 三小牛ハバ遺跡、No. 43 浄水寺跡）、祭祀遺跡（No. 9 小島西遺跡等）、工房（No. 5 下笠師E遺跡、No. 15 寺家遺跡等）となり、多岐にわたる所有・使用の実態がうかがえる。

出土状況 素材の特性上、含水率の高い溝、河道から大部分が出土する。これら以外は限定的で、建物柱穴1例（No. 28 無量寺C遺跡（無台椀1））、井戸・大型土坑7例となる。後者の内訳は、No. 5 下笠師E遺跡（荒型10 + 斎串）、



第1図 石川県内の8～11世紀代
白木地挽物容器等出土遺跡

第1表 石川県内の8～11世紀代挽物一覧表

遺跡番号	遺跡名	出土遺構	時期	白木挽物 ※(荒=荒型)				漆器	共存遺物				遺跡番号	遺跡名	出土遺構	時期	白木挽物 ※(荒=荒型)				漆器	共存遺物				
				壁	椀	皿 (甕器系)	他		曲物 容器	著状 木製品	土器	木製 祭祀具					壁	椀	皿 (甕器系)	他		漆器	曲物 容器	著状 木製品	土器	木製 祭祀具
1	南方遺跡	4区落ち込み	8c前～10c	1					○	×	×	×	20	加茂遺跡	5次C区SD5017	9c末～10c前	4					○	×	○	×	
2	真脇遺跡	X区第7層他	8c後～9c末	4 (有1)	2 (有2)				○	○か	○	×			5次B区大溝	8c前～10c初		1	2	小皿1		○	○	○	○	
3	釜屋谷B遺跡	土坑	9c後～10c					無台壁1	×	×	×	×			A区SD18	9c中	1			小皿1		○	○	×	○	
4	時国古屋敷遺跡	SE2、SD2a	9c後～10c初					無台壁2	○	×	×	×			B区SD6	8c後～9c前	2					×	○	○	○	
5	下笠師E遺跡	1号土坑	9c後	9 (荒9)	1 (荒1)				○	○	×	○			E区C-7鞍部(河邊1)他	9c中～末	3					○	×	○	○	
		鞍部	8c後か		1				○	×	×	×			千木ヤシキタ遺跡 SE03	11cか				小皿1	○か	×	×	×		
		1号溝	8c後か					無台皿1	×	×	×	×			23 磯部カンダ遺跡 SD16-7区	9c前～10c		1			有台椀1	○	○	○	◎	
		5区河跡	9c後～10c初	2					○	○	○	×			24 戸水C遺跡 D区SE1111	9c後	1					×	○	○	○	
6	三引遺跡	7区A27層	8c後～9c中	2					○	○	○	×			25 大友E遺跡 3区SD3002中層	8c後～9c末	5			有台鉢1		○	○	◎	○	
		10区上層包含層	平安か	2					○	○か	×	○			G区SE01	9c前～中					無台椀1	○	×	×	×	
		13区上層包含層	9c後～10c初	1					○	○か	○	×							1 (有1)			×	×	×	×	
		11区上層包含層	平安か	1					○	○	×	×			26 大友西遺跡 西SD166	9cまたは11c						無台壁1、 有台椀1	○か	○か	◎か	○
		東区包含層	8c後～10c初	3					◎	○	○	○			SD30上層	8c後葉～9c末						○	×	◎	◎	
7	吉田C遺跡	北調査区鞍部	8c後～9c中	1					○	×	○	×			SD30下層	8c後葉～9c末	3					無台壁1	○	×	◎	◎
8	杉本テラト遺跡	包含層	9cか	1					○	×	×	×			B4-5区・P90	8c後葉～9c末					高坏1	○	×	◎	◎	
9	小島西遺跡	D2区下層3層他	8c後～9c前	5					○	○	○か	◎			28 無量寺C遺跡 P5	8c中～9c初		1				×	×	×	×	
10	能登園分寺遺跡	7次SD31	9c前					無台壁1	×	×	○	×			29 畠田B遺跡 20西区SE1	9c後			1			×	×	×	○	
		7次大溝	9c後～10c初		1 (透か)				○	×	×	×			2区SD244	8c前か					無台椀1	×	×	○	×	
		包含層	8c前～8c末					椀2	○	○か	○	×			O1区SD07b	8c前～8c中	2					○	×	○	○	
12	四柳ミツコ遺跡	E区Ⅱ面東西トレンチ	8c～9c	1					-	-	-	-			SD16a・b、SD62	8c後～9c前	4					○	×	◎	○	
13	四柳白山下遺跡	B区Ⅱ面SD52	8c前～後	9					○	×	×	○			30 畠田・寺中遺跡 A6区河道	11c末～12c						無台壁5、 有台椀4、 槽2	×	○か	×	×
		1次A区SB1P-2	9c前					壹か 1	×	×	×	×			3区SD220	古代	1					○か	○か	○か	○か	
		2次E区Ⅲ-2面SD8	9c後	1					○	×	×	×			W区SD62	8c後～9c前	1					○	×	◎	○	
		2次E区Ⅲ-2面包含層	9c後	1					○	×	×	×			31 畠田ナベタ遺跡 SE603	11c前						無台皿1	×	×	×	○
		2次E区IV面SD80	8c後	1						○	×	○	×			SD21	8c前～9c末	1				槽1	○	×	○	○
		2次E区IV面SD87a	8c前	1					○	×	×	×			河道跡	8c前～8c後	1				台付稜盤1	○	○	○	○	
14	福井ナカミチ遺跡	SX311	9c前～9c中		1				○	×	◎	×			33 藤江B遺跡 ⅢSD38	8c前～9c中	1					○	×	○	○	
15	寺家遺跡	B区1号溝他	10c後～11c前	3					○	○か	×	○			34 ツツ寺遺跡 C区SX03	8c前・10c後か		1				○か	×	×	×	
		土坑状遺構	9c前		3 (荒3)			無台椀1	×	×	×	×			35 三小半ハノ遺跡 不明(コーナール溝)	8c前～9c末		1				無台壁2	◎	○か	◎	○
16	吉崎・次場遺跡	T-1号井戸	9c前～9c末	1					×	×	○	×			36 中屋サワ遺跡 SD30	8c後～10c初	1				小壺1	○	○	○	○	
17	杉野屋遺跡	A区SD4	8c初～9c中				1 (荒?)		○	○	◎	○			37 上荒屋遺跡 SD40	9c初～末		25 (有1)				無台壁3、 有台椀2	○	○	◎	◎
18	二口かみおれた遺跡	SD201	8c後～9c前	1					×	×	×	×			38 横江庄遺跡 第2次分洞E-4区他	9c初～末						壁1、椀1	○	×	×	×
19	指江B遺跡	F区河道	9c後～末	1				無台椀1	○か	×	○	○			39 徳久・荒屋遺跡 E地区大溝	9c前～9c中	3					○	○	○	×	
		G区河道	8c中か	2					○	×	○	○			40 高堂遺跡 1号溝	9c前～9c末			2 (有1)			○	○	◎	×	
		I区河道1-2	8c中～9c末	20				高台壁2 跡か1	○	○	○	○			41 松梨遺跡 4号溝最下層	9c後～10c初		1	1			○	×	○	×	
20	加茂遺跡	3次大溝	8c中～9c末						○	○	◎	○か			1号溝最下層	8c後～9c前						筒形容器1	×	×	◎	×
		3次SK33	9c後					有台椀1	×	×	○	×			42 荒木田遺跡 SX13	8c前～9c前	3					破片1	○	○	◎	○
		4次大溝・道跡遺構	9c前～10c初	4	2			小皿1	椀1	○	○	◎	○			Ⅱ-3・4テラス大溝	9c中～10c初		1	3 (有2)		無台皿(甕器系)1	○	○	◎	○
		B2区SD1-5(北大溝)	10c後～15c						皿1							Ⅲ-1・2テラス	9c中～10c			3		○	×	◎	×	
		B2区1面SD1-5下・6・7	9c末～10c前	3						○	○	○	○			44 松山C遺跡 SD02	9c中～10c初						椀1	○	○	◎
		9区NR01(北大溝)	9c末～10c前			2			○	×	◎	○										77%	43%	65%	51%	
		5次B区SK5016	9c前			2			×	×	○	○			44遺跡			144 (うち有2、荒型9)	19 (うち有4、荒型4)	16 (うち有3)						

第2表 石川県内の8～11世紀代挽物樹種一覧表

器 種	遺跡数	点数	広葉樹					針葉樹			不明
			ケヤキ	トチノキ	キハダ	モクレン	不明	スギ	ヒノキ	不明	
無台盤(荒型9含む)	25	142	70	1	1		5	23		3	39
有台壁	2	2						1			1
高台盤	1	2		2							
無台椀(荒型4含む)	11	15	8	1				1			5
有台椀	3	4	3								1
皿(甕器系)	5	16	4			1			2		9
無台皿(小皿)	2	3		1						1	1
稜盤	1	1									
鉢	1	2					2				

※樹種は、肉眼観察による同定を含む。

No.15 寺家遺跡（椀荒型3 + 漆器1）、No.16 吉崎・次場遺跡（無台盤1 + 墨書）、No.20 加茂遺跡5次SK5016（無台皿（瓷器系）2 + 斎串）、No.24 戸水C遺跡（無台盤1 + 斎串）、No.26 大友西遺跡（有台椀1）、No.29 畝田B遺跡（無台皿（瓷器系）1 + 馬形）であり、11世紀の可能性をもつNo.26以外は何らかの祭祀行為に伴う可能性が高い。また、各報告書掲載の遺構単位でみた共伴遺物は、曲物容器77%、箸状木製品43%、墨書土器65%、木製祭祀具51%となり、いずれも高い共伴率を示す。短絡的な結論は避けるべきだが、これら出土例の中に白木地挽物容器の使用や廃棄のパターンが内在する可能性をもち、特に曲物容器、墨書土器との間の強い親近性に注目したい。

出土点数 遺跡単位からみた出土点数は、No.19 指江B遺跡・No.37 上荒屋遺跡がともに25点と最も多く、No.20 加茂遺跡が23点と続く。なお、大量の木製祭祀具の出土から臨海部の「祓場」とされるNo.9 小島西遺跡は5点と少なく、使用・廃棄パターンが異なることが予想できる。

3 器形からみた推移

第2図のとおり、器形を整理した。盤144点（うち有台盤2点、荒型9点）、椀19点（うち有台椀4点、荒型4点）、皿（瓷器系）16点、皿（小皿）3点、高台盤2点と、無台盤の出土が圧倒的に多い（第2表）。

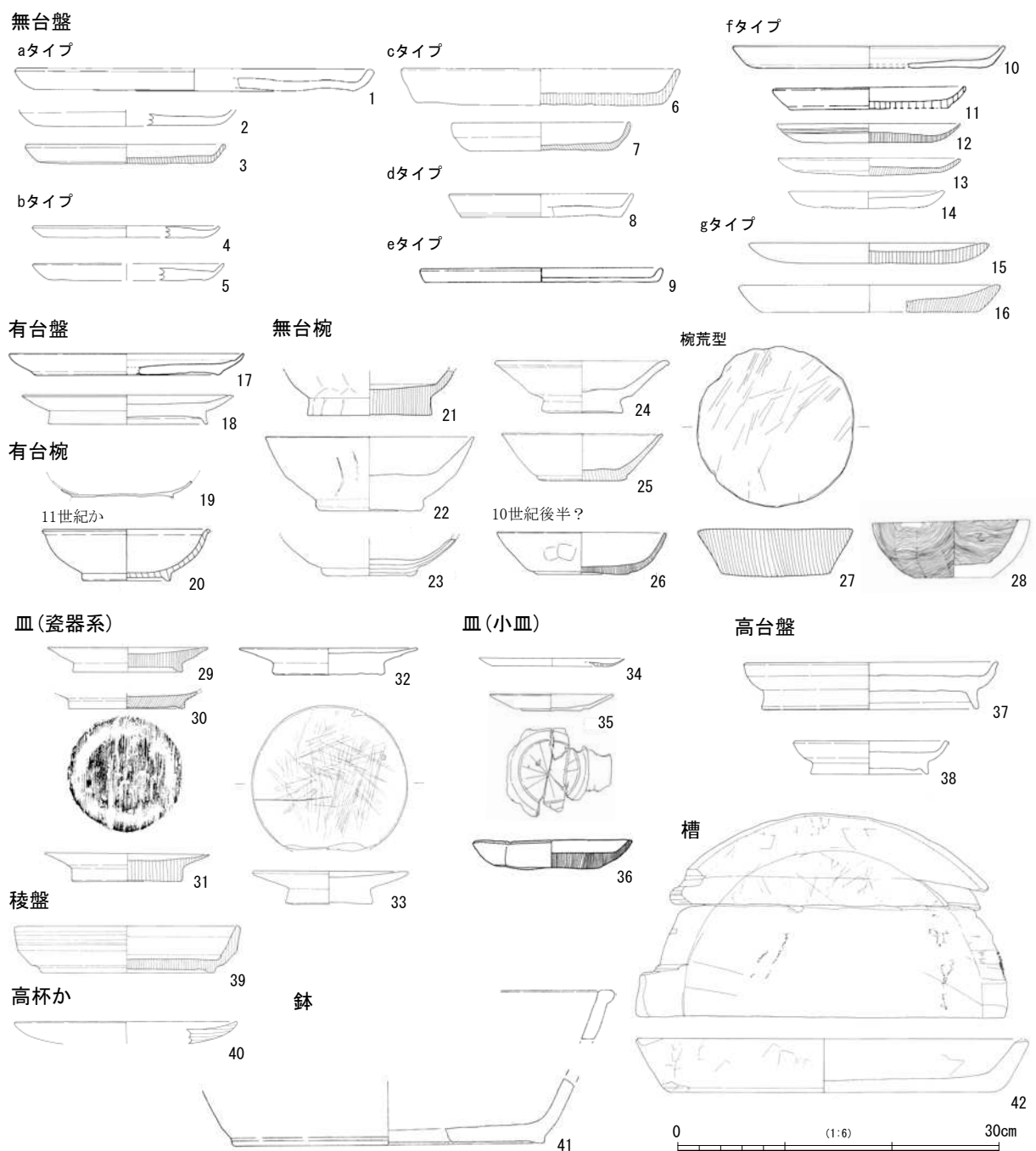
各器種の推移は、時期特定の困難さや、生産地、使用期間の長短等の課題が未整理であり、現時点では第4表を示すにとどめたい。県内の挽物容器の出現（生産）は、窯跡出土の須恵器盤類から律令制が整備されつつある8世紀前葉（Ⅲ期後半頃）と考えられ、無台盤を主体に少量の有台盤、椀が確認できる。9世紀後葉に無台盤が主体を維持したまま、新たに皿（瓷器系）が加わり、この状況が10世紀前葉まで続く。また、漆器と共通する新器形の椀（第2図20・26）が、10世紀後半以降に確認できる。樹種は、無台盤はケヤキが70点と最も多く、次いでスギが23点を数える（第2表）。高台盤、皿（瓷器系）、椀はケヤキを主体にトチノキ、ヒノキが用いられ、器種、時期のいずれが主要因か判断できない。

無台盤 有台盤を含めて133点を数え、金属製仏器を祖型に須恵器・漆器と互換性をもつ器種である。県内の出現期は、前述のとおり8世紀前葉と考えられ、No.15 寺家遺跡B区出土例以外は10世紀前葉までの出土例となる。法量がわかる99点は、口径14～37cm台（16～23cm主体）に分布、複数法量（複合用途）の集合体と評価できる（第5表）。文献にみえる「小盤、中盤、大盤」との関係でいえば、主体となる法量は、「小盤」と「中盤」小サイズに相当する。また、小西昌志氏の器形分類〔金沢市2000〕を参考に、a～gタイプに細分類したが、折衷的な器形も存在する（第2図・第3表）。須恵器無台盤の変遷から、基本的にa・bタイプからd・eタイプを経て、fタイプに主体が推移すると思うが、使用期間の長短もあり、必ずしも一律的な変化を示さない。

樹種については、能登地域で「大盤」以外のスギ例が多いことは、既に指摘されており〔久田2019〕、今回の集成でも8世紀代から北加賀を南限とする能登地域一帯に確認できる。スギ製無台盤は、f・gタイプを主体に、口径18～31cm台（「中盤」に相当）に分布、加工の制約をもちつつも広く利用されるようだ。また、円孔を穿ったコシキ底板転用例が、No.6 三引遺跡、No.7 吉田C遺跡で確認できる。

有台盤 No.2 真脇遺跡、No.37 上荒屋遺跡から各1点が出土する（第2図17・18）。須恵器と互換性をもつ器形であり、器形変化は無台盤に準じよう。口径20～22cmを測る。

高台盤 東海地方の灰釉陶器盤をモデルに、足高の台部をもつ盤である（第2図37・38）。No.19 指江B遺跡から2点が出土する（口径14cm・23cm、トチノキ）。須恵器と互換性をもつ器形であり、須恵器



1 小島西遺跡、2・4・5・18 上荒屋遺跡、3・37・38 指江B遺跡、6・15・16 四柳ミッコ遺跡、7 藤江B遺跡、8 四柳白山下遺跡、9・11・41 大友E遺跡、10・17 真脇遺跡、12・13・24・25・29・31・33・34 加茂遺跡、14 南方遺跡、19 三小牛ハバ遺跡、20 大友西遺跡、21・27 下笠師E遺跡、22・32 松梨遺跡、23 磯部カング遺跡、26 ニツ寺遺跡、28 寺家遺跡、30 浄水寺跡、33 畝田B遺跡、36 北中条遺跡、39・42 金石本町遺跡、40 戸水大西遺跡

第2図 石川県内の白木地挽物容器等分類図 (S = 1/6)

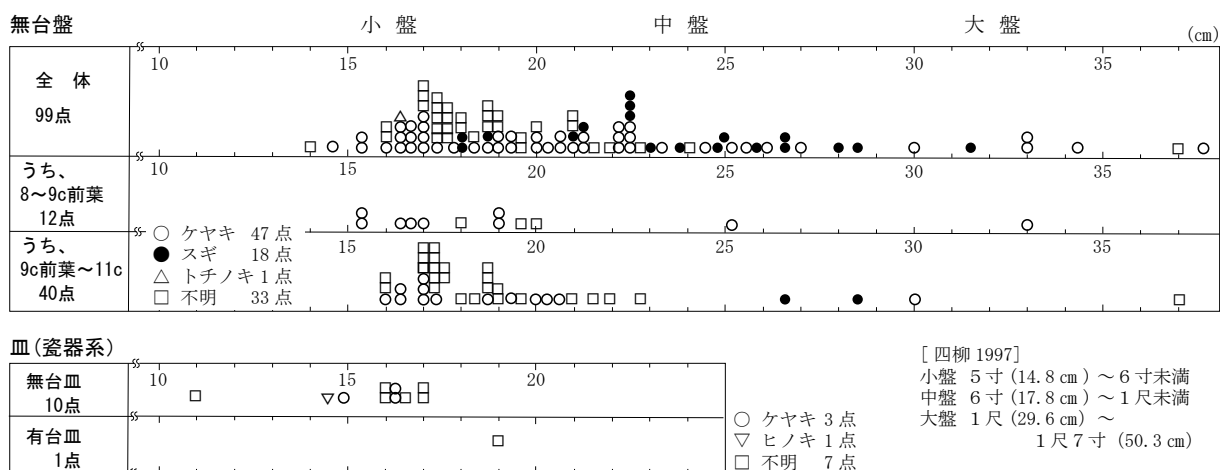
第3表 白木地無台盤の分類試案

aタイプ	体部が短く、口縁端部に平坦面をもつ。8世紀代主体。
bタイプ	底部は厚く、体部が短く立ち上がる。口縁端部を平坦または丸く仕上げる。
cタイプ	身は深く、体部が直線または内湾気味に長くのびる。口縁端部を丸く仕上げる。
dタイプ	底部と体部の境で明瞭に屈曲し、体部は直線的にのびる。口縁端部を丸く仕上げる。
eタイプ	広い底部から体部が短く直立する。Na 26 大友E遺跡で1点出土。
fタイプ	底部と体部の境が不明瞭で、体部は長くのびる。口縁端部を丸く仕上げる。9世紀代に主体をもち、時期が下がるにつれて体部は外傾具合を増す傾向を示す。
gタイプ	底部と体部の境付近が肥厚し、体部は短い。内面の屈曲が不明瞭で、スギ材に目立つ。

第4表 石川県内の白木地挽物容器推移表

時 期		無台盤	有台盤	高台盤	無台碗	有台碗	皿(瓷器系)	皿(小皿)
8c前葉	Ⅲ期	■	■		■	■		
8c中頃	Ⅳ ₁ 期	■	■		■	■		
8c後葉～9c初頭	Ⅳ ₂ 期	■	■		■	■		■
9c前葉～中頃	Ⅴ期	■	■	■	■	■		■
9c後葉～10c前葉	Ⅵ期	■	■	■	■	■	■	■
10c中葉～11c前葉	Ⅶ期	■			■	■	■	■
11c中葉	中世Ⅰ				■	■		

第5表 石川県内の白木地無台盤、無台皿（瓷器系）の口径分布表



製は9世紀前半の能美窯跡群和気白石窯等で焼成する他、新潟県内の須恵器窯跡でも定量生産することが確認されている。

無台碗 No.20 加茂遺跡等の11遺跡から15点(荒型含む)が出土、No.10 出土例は漆器の可能性をもつ。底部台状の器形(第2図21～25)と、11世紀以降につながる器形(同26)に大別できる。前者は、No.28 柱穴埋納例以外は、9世紀以降に位置付けられる。2法量(口径15cm・19cm台)が存在し、多様な器形から個別生産に近い印象を受ける。樹種は、ケヤキ8点、スギ・トチノキ各1点、不明5点となる(第2表)。

有台碗 No.2 真脇遺跡2点、No.26 大友西遺跡・No.35 三小牛ハバ遺跡各1点と、無台碗とくらべて出土例は少ない。No.26 出土の有台碗(第2図20、11世紀か)は、口縁部が外反する新しい器形を呈する。樹種不明のNo.35 以外はケヤキとなる。

皿(瓷器系) No.20 加茂遺跡(6点)、No.43 浄水寺跡(6点)等の5遺跡から16点(うち有台3点)が出土する。底部厚底の無台皿(第2図31～33)は、台部削り出しを省略したもので、本来、この器形は有台器種と考える。灰釉陶器皿をモデルに、須恵器、土師器、漆器と高い互換性をもつ器形で、須恵器・土師器製皿は県内全域で多出する他、漆器製はNo.43 から1点出土する。口径は、11cm前後、15cm弱、16～17cm、19cm(推定)に分布(第5表)するが、基本的に1法量であろう。須恵器製有台皿は、9世紀中頃(Ⅵ₁期)に出現、10世紀前葉(Ⅵ₃期)に口径が縮小する。樹種は、ケヤキ、モクレン属、ヒノキと種類が多い点の特徴とする(第2表)。

無台皿(小皿) 9世紀～10世紀前葉に、漆器酷似の精製品2点(第2図34・35)と、厚手の粗製品1点(同

36) が出土、器形は斉一性に乏しい。第2図35はトチノキ製、36は針葉樹と報告される。

稜盤 No.32 金石本町遺跡から1点が出土する。体部中程に稜を表現し、金属器製高台付盤と似る。

鉢 No.25 大友E遺跡から広葉樹製1点が出土する。漆器に類例をもつ精製品である[金子1995]。

荒型 No.5 下笠師E遺跡、No.15 寺家遺跡、No.17 杉野屋遺跡で出土、うちNo.5は官営工房と目される。

4 まとめにかえて

白木地挽物容器の位置付け 古代の小型食器は、列島各地で金属器、木器（漆器・白木地木器）、土器が「写しの関係」をもつ「律令的食器様式」の体系を構築する。この体系は、9世紀以降、各地域で素材特性に応じた転換がそれぞれに進展、11世紀以降の北陸では新たな食器体系（実用器「漆器、磁器」、仮器「土師器皿」）が成立する[国歴民1997]。県内の白木地挽物容器は、8世紀前葉～10世紀前葉の律令制が実態をもつ時期に一定レベル以上の多様な遺跡から出土する点に特徴をもち、極めて律令的食器といえる。器種は、

①土器、漆器と互換性の高い器種：無台盤、皿（瓷器系）、（有台盤、高台盤）

②土器と互換性はなく、漆器と互換性をもつ器種：無台碗、有台碗、皿（小皿）

に大別でき、この基本的な原則のもと、各地域で重層的な食器の一部を構成したと考える。①の中で圧倒的に多い無台盤は、能登地方では導入当初からケヤキ・スギ材を用いるようだ。また、簡素な渋下地漆器との関係では、白木地挽物容器生産からの展開は想定できず、あくまで漆器生産の技術革新と考える。

白木地無台盤の所有・使用 関根真隆氏[関根1969]は、無台盤が「木盤」「木佐良」の名で文献に登場、造石山院所用度帳の「木盤玖拾口」を「右役夫料」として用いる事例を示し、下層者の使用頻度の高い食器と推定する。さらに、市での価格は土製片盤と大差ない1・2文で、その用途は副食物を盛り、大型の盤は盛付用、小盤は各自の食用と論ずる。また、東大寺領桑原庄の雑物（天平勝宝7年「越前国使等解」）にある「田筒一百合、木佐良一百口、田坏二百口」は、曲物容器（蓋付）、無台盤、須恵器無台坏を組み合わせた、開墾事業に従事する役夫の食器と解釈される。この中央の給食方法を直接持ち込んだ桑原庄の様相は、東大寺領横江荘であるNo.37 上荒屋遺跡の無台盤（口径16～20cm、平均18cm）や多くの曲物容器出土を想起させる。

白木地無台盤と土製無台盤を比較した場合、須恵器製無台盤は南加賀窯跡群で8世紀前葉に出現、定量生産する一方、能登・越中（・越後）では低調な器種である。また、9世紀代のNo.15 寺家遺跡周辺でミガキを加えた酸化焼成の須恵器製無台盤が目立つこと等、北陸の食器様式の中でも、土製無台盤と汎日本的な木製無台盤との間に、所有や使用に関して細地域差・遺跡差が存在する。単なる分布以上の研究の深化が待たれる。

白木地無台盤の使用状況については定見を得ていないが、一定レベル以上の所有者の意図により、実用面（使いやすさ、廉価性・耐久性）と、白木地のもつ非実用面（無垢性）のいずれを重視するかが、今回の集成に現れた多様な使用実態理解の鍵と考える。先述のとおり、県内の白木地挽物容器は、漆器以上に、小型曲物容器（筥）、箸状木製品、墨書土器、木製祭祀遺物との共伴例が多く、特に小型曲物容器、墨書土器と高い確率で共伴する。小型曲物容器も、律令制のもとで存在しえた食器と考えており、実用面を重視した場合は、文献に登場するような白木地無台盤と組み合わせた使用となる。一方、非実用面を重視した場合、墨書土器や木製祭祀具と組み合わせて使用・廃棄すると想定できよう。

さらに、今回未検討だが、白木地無台盤、皿（瓷器系）の器面には、内外面とも直線的刃物痕が顕

著に残る例が少なくない。単に俎板転用と報告されることが多いが、刃物（短刀か）の所有、調理・食事の場の復元、数十条以上の刃物痕を残すような使用方法・期間の検討が、使用実態を復元する糸口と考える。

末文とはなるが、令和元年度から県内の挽物容器の資料集成を担当した久田正弘、熊谷葉月両氏に深く感謝申し上げます。また、古代の食器を考えるにあたり、箸、匙、調理具を含む土器以外の食器の集成、研究が重要な位置を占める。本報告がその一助にでもなれば望外の幸せである。

引用・参考文献（県内の挽物容器出土遺跡は、資料集文献を参照。）

- 金子裕之 1995「8・9世紀の漆器－身分表示の食器－」『文化財論叢Ⅱ』同朋舎出版
- 川畑 誠 1994「石川県内出土の木製食器・容器に関する覚書」『北陸古代土器研究 第4号』北陸古代土器研究会
- 小西昌志他 2000『石川県金沢市上荒屋遺跡Ⅳ』金沢市教育委員会
- 国立歴史民俗博物館 1997『国立歴史民俗博物館研究報告 第71集 中世食文化の基礎的研究』
- 品田高志 1997「北陸における古代と中世の木製食器」『北陸古代土器研究 第7号』北陸古代土器研究会
- シンポジウム実行委員会 1990『シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」』シンポジウム実行委員会
- 関根真隆 1969『奈良朝食生活の研究』吉川弘文堂
- 田嶋明人他 1996『月刊考古学ジャーナル No.404』ニュー・サイエンス社
- 久田正弘 2019「古代能登の挽物について」『石川県埋蔵文化財情報 第41号』（公財）石川県埋蔵文化財センター
- 北陸古代土器研究会 1994『北陸古代土器研究 第4号』
- 北陸中世土器研究会 1992『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』、1995『中世北陸の木製容器』、1997『北陸の漆器考古学－中世とその前後－』
- 埋蔵文化財研究会 1996『古代の木製食器』第39回埋蔵文化財研究集会第1・2分冊
- 山田昌久・伊藤隆夫 2012『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社
- 四柳嘉章 1991「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会々誌 第34号』石川考古学研究会
- 四柳嘉章 1992「北陸・東北における古代・中世漆器の髹漆技術と画期」『石川考古学研究会々誌 第35号』同上
- 四柳嘉章 1997「概説北陸の漆器考古学－中世とその前後－」『北陸の漆器考古学－中世とその前後－』北陸中世土器研究会